

美術館のアプローチ空間に関する研究

Study on the Approach Spaces of the Art Museum

間瀬 正彦¹⁾ 坂下 理絵²⁾ 友松 加奈絵³⁾

金城学院大学生活環境学部¹⁾

株式会社岡谷特殊鋼センター²⁾

吉野石膏株式会社³⁾

キーワード：美術館 アプローチ空間 導入空間 類型化

Masahiko Mase¹⁾ Rie Sakashita²⁾ Kanae Tomomatsu³⁾

Kinjo Gakuin University, College of Human Life and Environment¹⁾

Okaya Special Steel Center²⁾

Yoshino Gypsum Co., Ltd³⁾

Keywords: Art Museum, Approach Spaces, Entry Space, Typification

Abstract

The spatial experience in the art museum has much influence on the impressions that the works of art give. The approach spaces that include the approach to the building and the entry space of the inside are particularly impressive, and have been elaborated in various ways in Japan. In this study, we divided the approach spaces of the Japanese museums into different types from the following points of view: the changes in width, height, level, and look of the building and the impression of the building. We have also investigated the meanings of each type.

1. 序論

美術館における主役は、展示されている美術作品であることは言を俟たない。しかしながら、美術館の内外で体験される空間も、そこでの芸術鑑賞行動や、それによって形成される印象に少なからず影響を与えているものと思われる。中でも敷地入口からエントランスまでの外部アプローチ、そしてエントランスから展示室までの導入空間（本論では両方をあわせてアプローチ空間とする）は、美術館において体験される空間の中でも、特に印象深い部分で、多くの美術館で様々な工夫が凝らされてきた。

しかしながら、近年、簡素化されたアプローチ空間を持つものが、話題となった美術館において現れた。例えば SANAA による「金沢21世紀美術館（2004）」では、大規模な美術館であるにもかかわらず、外部アプローチは演出する要素が少なく広場のようなものである。導入空間も非常に開放的で、空間変化に乏しい。西沢立衛による「十和田市現代美術館（2008）」でも、外

部アプローチは短く目立たない。導入空間も非常に簡素である。このようにアプローチ空間が簡素化される背景には、美術館に対する考え方の変化があると考えられる。

美術館は、長く、作品を権威づける制度として機能してきたが、制度としての美術館を乗り越えようとする企ての一つとして、美術館を「開く」ことが、近年、重要なテーマとなってきた¹⁾²⁾。また、これまで多くの建築設計資料では、美術館は「非日常」的空間として扱われてきたが³⁾⁴⁾、現代芸術を扱う美術館を中心に「敷居の低い美術館」⁵⁾、すなわち美術館における「日常」との連続性が意識されるようになってきた。

しかし、全ての美術館で「開く」ことや「日常」との連続性がテーマとされている訳ではない。例えば、安藤忠雄による「李禹煥美術館（2010）」では、個人美術館ということもあり、演出性の高い「象徴的」⁶⁾な外部アプローチが形成されている。美術館に対する考え方も一様ではない。そこで、本研究ではアプローチ空間の構成が、どのように美術館に対する考え方を象徴するものとなるのかを考察していく。そのことで、美術館のアプローチ空間の計画指針の形成に寄与していきたいと考える。

さて、本論では、アプローチ空間の構成を類型化するために、「空間変化」と「建物外観の印象」に着目した。なぜならば「空間変化」が、日常と非日常の間に線引きをする上で、空間演出上の重要な操作となると考えたからである。また、「建物外観の印象」も、美術館に対する考え方を表明するような意味を持ちうると考えた。なお、ここでは「空間変化」を、「空間幅」「高さ」「高低差」「建物の見え方」の変化に絞って分析することとした。

よって、本研究ではアプローチ空間を、「空間変化」と「建物外観の印象」の視点から類型化し、背景にある美術館に対する考え方の多様化を踏まえた上で、それぞれの類型が象徴する意味を考察していく。

2. 研究方法

本研究で分析の対象とした美術館は、建築雑誌『GA Japan』（A. D. A. EDITA Tokyo）の01号（1992年10月）から129号（2014年7月）に掲載された作品の中で、用途が美術館であるもの、用途に美術館の記載がなくても、建物名称が美術館であるもの、さらに国内に建設されたものとした。ただし、既存建物の改修、増築の作品、用途に美術館とあっても展示室がない作品、実際にはホテルとして使用されている作品、既に取り壊されている作品は除外した。よって、本論では62の美術館が分析の対象となった（表1）。このうち、50の美術館については、実際に現地にて調査を行った。その他の12の美術館については、雑誌『GA Japan』『新建築』（新建築社）及びGoogle マップを用いて分析を行った^{註1)}。

研究の方法は以下の通りである。まず、アプローチ空間を、空間変化の視点から、いくつかの領域に分けた。そして、外部アプローチについては、「空間幅」「空間の高さ」が、前の領域に対してどのように変化するか、「高低差」「建物の見え方」が、それぞれの領域でどのように変化しているかを記述した。内部の導入空間については、「空間幅」「天井高」が、前の領域に

対してどのように変化したか、「高低差」がそれぞれの領域でどのように変化しているかを記述した。さらに、外部アプローチにおいて感じられる「建物外観の印象」を記述した。

以上の分析結果から、アプローチ空間の類型化を試みた(表1)。そして、それぞれの類型が象徴する意味について考察を行った。

表1 分析対象となった美術館の一覧と分析結果

施設 番号	美術館名	建物規模 延べ床面積㎡	幅一外部	幅一内部	高さ一外部	高さ一内部	高低差	見え方	建物外観印象
3	信州高遠美術館	4,424.77	広がり型	広がり型*1	開放型	くびれ型	下降型	見えない→見える型	
4	直島コンテンポラリーアートミュージアム	1,982.78	複数変化型	無変化型	開放型	無変化型	上昇型	複数変化型	
5	井波彫刻総合会館	1,357.26	くびれ型	無変化型	開放型	無変化型	上昇型	見えない→見える型	建築オブジェ型
8	リアスアーク美術館	4,601.22	壺型	広がり型	開放型	増加型	上下型	見えない→見える型	建築オブジェ型
8	奈良町現代美術館	1,887.21	開放型	広がり型*1	開放型	増加型	水平型	全体見える型	建築オブジェ型、内容表出型
13	サントリーミュージアム「天保山」	13,804.11	広がり型	複数変化型	開放型	山型	上昇型	全体見える型	
14	東京都現代美術館	33,515.01	広がり型	広がり型	開放型	増加型	上昇型	全体見える型	権威主義型
16	成羽町美術館	2,691.08	広がり型	広がり型	開放型	無変化型	上昇型	複数変化型	権威主義型
17	バトリ+清里フォトアートミュージアム	3,850.82	無変化型	壺型	開放型	山型	水平型	全体見える型	
18	豊田市美術館	11,238.41	壺型	くびれ型	くぐる型	山型	上昇型	見えない→見える型	
21	大山崎山荘美術館	271.51		無変化型		増加型	下降型		
22	FIN/新島現代ガラスアートミュージアム	263.92	壺型	無変化型	開放型	増加型*2	下降型	全体見える型	展示室透過型
23	岡崎市美術博物館	6,444.16	広がり型	くびれ型	開放型	山型	上下型	一部見える型	
23	浜田市世界こども美術館	3,609.38	複数変化型	くびれ型	開放型	複数変化型	上昇型	複数変化型	高透過性型
23	アンパンマンミュージアム	1,813.42	開放型	壺型	開放型	山型	複数変化型	全体見える型	高透過性型
27	熊野古道なかへち美術館	752.30	開放型	広がり型	開放型	増加型	水平型	全体見える型	高透過性型
29	MIHO MUSEUM	20,780.59	複数変化型	壺型	くぐる型	減少型	上昇型	見えない→見える型	
30	酒田市美術館	2,982.54	くびれ型	複数変化型	くぐる型	複数変化型	上昇型	見えない→見える型	
32	佐川美術館	5,833.21	複数変化型	広がり型	くぐる型	増加型	水平型	見えない→見える型	
33	天童市秋野不矩美術館	999.64	広がり型	壺型	開放型	山型	上昇型	複数変化型	
34	細見美術館	1,398.32	すぼまり型	無変化型	くぐる型	無変化型	水平型	全体見える型	
35	日没閉館織田廣喜ミュージアム	196.15	すぼまり型	無変化型	開放型	無変化型	下降型	複数変化型	
35	詩とメルヘン絵本館	448.40	開放型	広がり型	開放型	無変化型	水平型	全体見える型	
39	不知火町立美術館・図書館	1,793.18	開放型	広がり型	開放型	減少型	水平型	全体見える型	
40	東京藝術大学大学美術館	8,719.76	無変化型	壺型	開放型	山型	下降型	全体見える型	
46	石の美術館	527.57	複数変化型		くぐる型		水平型	複数変化型	
47	感覚ミュージアム	1,981.74	すぼまり型	広がり型	開放型	不明	水平型	見えない→見える型	建築オブジェ型
47	馬頭町広重美術館	1,962.43	すぼまり型	壺型	開放型	増加型	上昇型	全体見える型	
48	霧島アートホール	2,229.37	すぼまり型	広がり型*1	開放型	山型	水平型	見えない→見える型	
49	せんだいメディアテーク	21,682.00	開放型	くびれ型	開放型	複数変化型	上昇型	全体見える型	高透過性型
54	群馬県立館林美術館	6,856.47	壺型	壺型	開放型	山型	水平型	見えない→見える型	
58	ポーラ美術館	8,322.67	無変化型	広がり型*1	開放型	複数変化型	下降型	一部見える型	
58	兵庫県立美術館	27,461.41	すぼまり型	くびれ型	くぐる型	複数変化型	水平型	全体見える型	権威主義型
59	セラックパークMINO	14,466.05	複数変化型	広がり型	くぐる型	山型	下降型	見えない→見える型	
66	神奈川県立近代美術館 葉山	14,824.67	壺型	広がり型	開放型	増加型	水平型	見えない→見える型	権威主義型
69	村井正誠記念美術館	267.97	くびれ型	無変化型	開放型	無変化型	水平型	見えない→見える型	展示室透過型
70	地中美術館	2,573.48	くびれ型	くびれ型	くぐる型	山型	上昇型	見えない型	
71	金沢21世紀美術館	17,363.71	開放型	広がり型	開放型	増加型	水平型	全体見える型	高透過性型
74	富弘美術館	2,463.50	開放型	壺型	開放型	無変化型	水平型	全体見える型	
74	長崎県美術館	9,893.07	開放型	壺型	開放型	減少型	上昇型	全体見える型	
76	香川県立東山魁夷せとうち美術館	853.15	広がり型	広がり型	開放型	無変化型	水平型	見えない→見える型	
77	絵本美術館	634.05	開放型	広がり型	開放型	増加型	下降型	全体見える型	
77	茅野市民館	10,806.37	開放型	くびれ型	開放型	山型	水平型	全体見える型	展示室透過型
78	ラムネ温泉館	426.28	無変化型	複数変化型	開放型	複数変化型	水平型	全体見える型	
79	SSM(菅野美術館)	220.49	開放型		開放型		上昇型	全体見える型	
82	青森県立美術館	21,333.13	壺型	くびれ型	開放型	複数変化型	下降型	見えない→見える型	
82	国立新美術館	49,834.00	すぼまり型	広がり型	開放型	山型	水平型	全体見える型	
86	サントリー美術館	4,663.23		くびれ型		くびれ型	上昇型		
87	横須賀美術館	12,095.15	開放型	壺型	開放型	増加型	上昇型	全体見える型	高透過性型
87	KEYFOREST871228(キース・ヘリング美術館)	842.03	広がり型	壺型	開放型	山型	複数変化型	見えない→見える型	建築オブジェ型
87	むねの木こども美術館	462.86	くびれ型	無変化型	くぐる型	無変化型	上昇型	複数変化型	内容表出型
92	十和田市現代美術館	2,078.38	すぼまり型	広がり型	開放型	増加型	水平型	全体見える型	展示室透過型
92	犬島アートプロジェクト「精錬所」	789.59	すぼまり型	無変化型	開放型	無変化型	水平型	一部見える型	
101	根津美術館	4,014.08	くびれ型	広がり型	開放型	くびれ型	水平型	一部見える型	内容表出型
106	李禹煥美術館	443.04	複数変化型	広がり型	開放型	増加型	下降型	見えない→見える型	
108	豊島美術館	2,334.73	複数変化型		開放型		上下型	複数変化型	建築オブジェ型
110	光の美術館	120.91	開放型	無変化型	開放型	無変化型	水平型	全体見える型	
112	今治市伊東豊雄建築ミュージアム	168.99	開放型	無変化型	開放型	無変化型	下降型	全体見える型	建築オブジェ型
112	今治市岩田建母と子のミュージアム	197.29	開放型	無変化型	開放型	無変化型	水平型	全体見える型	
113	軽井沢千住博美術館	1,818.42	無変化型	無変化型	開放型	無変化型	水平型	一部見える型	
116	ヤオコー川越美術館	464.30	開放型	無変化型	開放型	無変化型	水平型	全体見える型	
129	秋田県立美術館	3,746.00	開放型	すぼまり型	開放型	減少型	上昇型	全体見える型	

*黒数字の美術館は実地調査を行った。 ※一部の美術館では、現在、名称が変更されている。

3. 分析結果

3-1 外部アプローチの空間幅の変化について（表1「幅—外部」欄）

外部アプローチを、空間幅の変化の視点からタイプ分けをすると、図1のように「すぼまり型」「広がり型」「壺型」「くびれ型」「複数変化型」「開放型」「無変化型」に分けることができた。なお、ここでは建物に接続する長い庇の空間は、外部空間として扱った。

「すぼまり型」（9例）は、美術館建物に近づくにつれて、空間幅が狭くなって行くタイプである。なお、今回の分析対象では空間変化が軽微なものがほとんどであった。「広がり型」（8例）は、空間幅が広がって行くタイプである。「壺型」（6例）は、外部アプローチの中程が広がり、両端が狭まっているタイプである。「くびれ型」（6例）は、外部アプローチの両端が広く、中間に狭まる領域を持つタイプである。「複数変化型」（8例）は、外部アプローチに狭まりと広がりの変化をそれぞれ複数持つタイプである。「開放型」（18例）は、美術館建物の周囲が開放され、空間幅の変化がないタイプである。「無変化型」（5例）は、外部アプローチの両側が閉じられ、かつ、空間幅の変化がほとんどないタイプである。

3-2 導入空間の空間幅の変化について（表1「幅—内部」欄）

館内部の導入空間を、空間幅の変化の視点からタイプ分けをすると、図2のように「すぼまり型」「広がり型」「壺型」「くびれ型」「複数変化型」「無変化型」に分けることができた。なお、ここでは風除室から展示室前の空間までの空間幅の変化を見た。また、エレベーターも空間幅の変化に含めた。

「すぼまり型」（1例）は、導入空間において、展示室に近づくにつれて空間幅が狭くなって行くタイプである。「広がり型」（21例）は、逆に空間幅が広がって行くタイプである。なお、その多くは風除室からエントランスホールといった単純な構成で、複数回、空間幅が変化するもの（表1の「幅—内部」欄で*1印をつけたもの）は4例のみである。「壺型」（11例）は、導入空間の中程が広がり、両端が狭まっているタイプである。「くびれ型」（9例）は、風除室

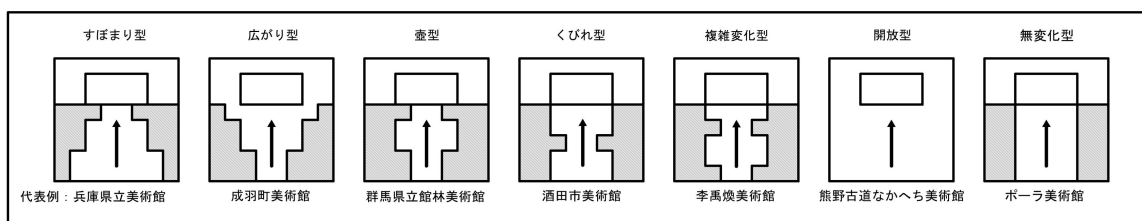


図1 外部アプローチの空間幅の変化

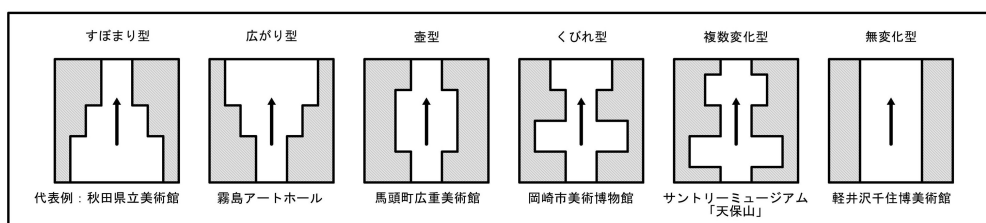


図2 導入空間の空間幅の変化

を除いて、導入空間の中間にもう1か所狭まる領域を持つタイプである。「複数変化型」(3例)は、風除室を除いて、空間幅が狭まる領域を2か所以上持つタイプである。「無変化型」(14例)は、空間幅にほとんど変化がないタイプである。なお、このタイプの美術館は、小規模美術館か、導入空間が簡素で領域数が少ないものがほとんどである。

3-3 外部アプローチの高さの変化について (表1「高さ-外部」欄)

外部アプローチ空間を、高さの変化の視点からタイプ分けすると、図3のように「開放型」と「くぐる型」に分けることができた。

「開放型」(50例)は、外部アプローチの全てが、天空に対して開かれているタイプである。一方、「くぐる型」(10例)は、外部アプローチにおいて、一旦、何かをくぐって先に進むタイプである。なお、具体的に何をくぐるかについては、トンネルが2例、建物が3例、庇が2例、壁が2例、梁が1例であった。

3-4 導入空間の高さの変化について (表1「高さ-内部」欄)

導入空間を、天井高の変化の視点からタイプ分けをすると、図4のように「増加型」「減少型」「山型」「くびれ型」「複数変化型」「無変化型」に分けることができた。なお、ここでは風除室から展示室前の空間までの高さの変化を見た。また、エレベーターも高さの変化に含めた。

「増加型」(14例)は、導入空間において、展示室に近づくにつれて天井高が高くなって行くタイプである。なお、その多くは風除室からエントランスホールへと天井高が高くなるもので、複数回、高さが変化するもの(表1の「高さ-内部」欄で*2印をつけたもの)は1例のみである。「減少型」(4例)は、逆に天井高が低くなって行くタイプである。なお、複数回、高さが変化するものはなかった。「山型」(14例)は、導入空間の中程が高く、両端が低くなっているタイプである。「くびれ型」(3例)は導入空間の両端が高く、中程に低くなる領域を持つタイプである。「複数変化型」(7例)は、導入空間に、前の領域より天井が高くなる領域を2か所以上持つタイプである。「無変化型」(16例)は、天井高がほとんど変化しないタイプで

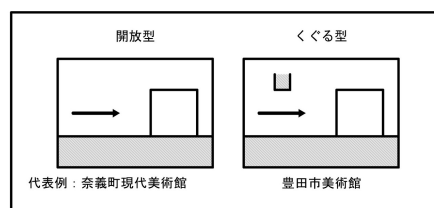


図3 外部アプローチの高さの変化

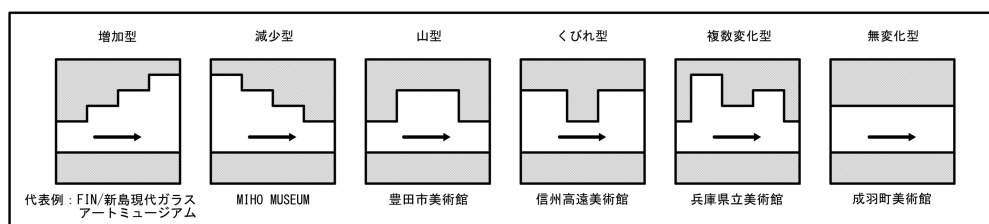


図4 導入空間の高さの変化

ある。なお、このタイプの美術館は、小規模美術館か、導入空間が簡素で領域数が少ないものがほとんどである。

3-5 アプローチ空間の高低差の変化について（表1「高低差」欄）

アプローチ空間（外部アプローチ及び導入空間）を、地面や床面の高低差の変化の視点からタイプ分けをすると、図5のように「上昇型」「下降型」「上下型」「複数変化型」「水平型」に分けることができた。なお、ここではエレベーターによる移動も、高低差の変化に含めた。

「上昇型」（19例）は、アプローチ空間が上昇して行くタイプである。なお、外部アプローチ、導入空間ともに上昇する領域を持つ美術館は4例のみであった。「下降型」（11例）は、アプローチ空間が下降して行くタイプである。なお、外部アプローチ、導入空間ともに下降する領域を持つ美術館は2例のみであった。「上下型」（3例）は、アプローチ空間が上がって下がる、もしくは下がって上がるタイプである。「複数変化型」（2例）は、アプローチ空間において、上下の変化の山もしくは谷が2つ以上あるタイプである。「水平型」（27例）は、アプローチ空間がほぼ水平となっているタイプである。なお、軽微な上昇、下降の領域を持つものは、このタイプに含めた。

3-6 外部アプローチにおける建物の見え方の変化について（表1「見え方」欄）

外部アプローチを、美術館建物の見え方の変化の視点からタイプ分けをすると、図6のように「見えない→見える型」「見える→見えない型」「一部見える型」「全体見える型」「見えない型」「複数変化型」に分けることができた。なお、この分類では、中庭やそれに類する空間は、全体が見える状態として扱った。

「見えない→見える型」（17例）は、外部アプローチ空間において、建物が見えない（もしくは一部見える）状態から、より見える状態へと変化するタイプである。「見える→見えない型」は、建物が見える状態から、より見えない状態へと変化するタイプであるが、このタイプに該当する例はなかった。「一部見える型」（5例）は、建物が一部見える状態が続くタイプで

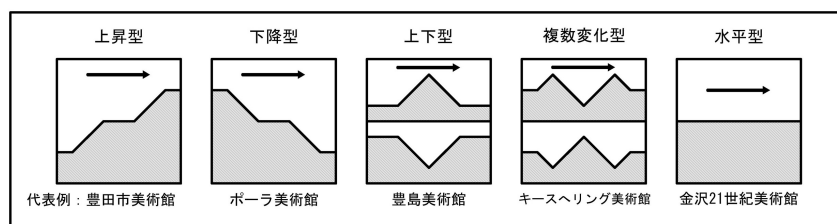


図5 アプローチ空間の高低差の変化

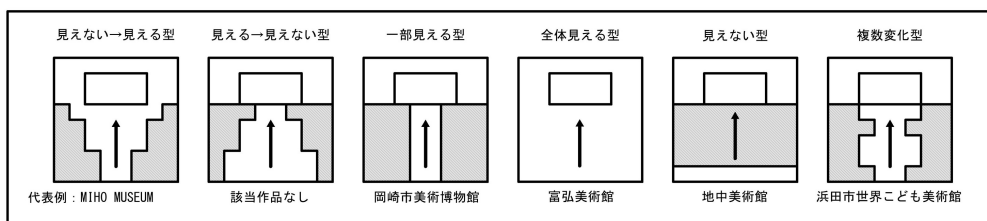


図6 外部アプローチにおける建物見え方の変化

ある。「全体見える型」(28例)は、建物全体が見える状態が続くタイプである。「見えない型」(1例)は、建物が全く見えない状態が続くタイプである。「複数変化型」(8例)は、建物が「見える→見えない→見える」のように見え方が複数変化するタイプである。

3-7 建物外観の印象について(表1「建物外観印象」欄)

建物外観の印象は主観に関わるものなので、実際には個々人において様々であるが、ここでは序論で触れたように「開く」「閉じる」「象徴性」をキーワードに、美術館に対する考え方を象徴するものとなりうる5つのタイプを設定した。

「建築オブジェ型」(7例)は、建築そのものに何かを象徴するような芸術的な表現が与えられ、それ自身が芸術作品とならんとするタイプである。「権威主義型」(4例)は、建物が大きく(あるいは大きく見せられ)、かつ外部に対して閉鎖的で、美術館全体に近寄り難い、もしくは冷たい印象が感じられるタイプである。「展示室透過型」(4例)は、展示室内部すなわち展示されている作品が、外部から一部もしくは全部見えるタイプである。「高透過性型」(7例)は、展示室内部までは見えないものの、外壁にガラスが多用され、外部から建物内部の様子が良く見える開放的なタイプである。「内容表出型」(3例)は、建物の外観が展示内容を暗示するタイプである。

4. 考察

以上の分析結果を踏まえて、それぞれの類型が象徴する意味を考察していく。考察にあたっては、序論で触れた「開く」「閉じる」「非日常」「日常」「象徴性」の5つを主要なキーワードとする。

4-1 外部アプローチの空間幅の変化についての考察

外部アプローチの空間幅の変化については、7つのタイプを見いだすことができた。「すぼまり型」「広がり型」「壺型」「くびれ型」「複数変化型」の5つのタイプは、いずれも空間が狭められた領域を持つため、美術館と外界との間に心理的な境界線を生じさせ、美術館(あるいはその中の展示室や美術作品)を特別な存在、あるいは「非日常」の世界とする意味を生じさせる可能性がある。なお、「すぼまり型」では美術館に近づくにつれて空間が狭まり、緊張感が高まっていく空間演出となり、「広がり型」「くびれ型」では逆に空間が広がり、緊張感が解かれていく空間演出となる。「壺型」「複数変化型」では空間の狭まり(=緊張)が複数回、繰り返され、より劇的な空間演出となる。一方、「開放型」は敷地が周囲に対して開放的なために、美術館と外界との間に心理的な境界線を生じさせない。それゆえ、美術館(展示室、美術作品)を特別な存在とせず、「日常」と連続した世界とする意味を生じさせる可能性がある。「無変化型」は、アプローチ空間が直線の場合、神社の参道のごとく、奥行き感を生じさせ、美術館(展示室、美術作品)を特別な存在とするだけでなく、より高尚な存在として強調する意味を生じさせる可能性がある。

4-2 導入空間の空間幅の変化についての考察

内部導入空間の空間幅の変化について、6つのタイプを見いだすことができた。「すばまり型」「壺型」「くびれ型」「複数変化型」の4つのタイプは、いずれも空間を狭める領域を持つため、導入空間に心理的な境界線を生じさせ、展示室（あるいはその中の美術作品）を特別な存在、あるいは「非日常」の世界とする意味を生じさせる可能性がある。なお、これらのタイプの中で、最終的に空間が狭められているものでは、緊張感が高いまま観覧者を展示室に導く空間演出となる。また、空間変化の数が多くなる程、より劇的な空間演出となる。「広がり型」は、前述のように多くが「風除室-エントランスホール」の空間構成である（表1の「幅一内部」欄の「広がり型」で*1印のないもの）。このような空間構成の場合、導入空間に心理的な境界線を生じさせる可能性は小さい。「広がり型」でも空間幅の変化の数が増える程、心理的な境界線を生じさせる可能性がある。いずれにしても、最終的に空間が広げられているので、緊張感を解いてから観覧者を展示室に導く空間演出となる。「無変化型」は、前述のように小規模美術館が多いが、中には導入空間を簡素にし、大げさな演出を避けている例も見られる。この場合は、展示室を特別な存在としないという意味を見いだすことができる。

4-3 外部アプローチの高さの変化についての考察

外部アプローチの高さの変化については、「開放型」「くぐる型」の2つのタイプを見いだすことができた。「開放型」は、ごく一般的なタイプで、このタイプに特別な意味はない。一方、「くぐる型」では、トンネル、建物、庇、梁が、美術館を内と外の二つの領域に分ける役割を果たしている。そのため、美術館を特別な存在と意味づけるのに有効なアプローチタイプと言うことができる。ただし、「石の美術館」「ねむの木こども美術館」では、美術館を特別な存在とするためというよりも、アプローチ空間を複雑にし、狭い敷地をより広く、変化のあるものとするため、「くぐる型」のアプローチが用いられていると考える。

4-4 導入空間の高さの変化についての考察

導入空間の高さの変化について、6つのタイプを見いだすことができた。「増加型」と「減少型」にタイプ分けされた今回の分析対象では、複数回、空間の高さが変化するもの（表1の「高さ一内部」欄で*2印のもの）がほとんどなく、ほぼ「無変化型」と同様の空間的性質を持つものであった。従って、導入空間に心理的境界を生じさせる可能性は小さい。「山型」では、導入空間の中程に、天井の高い空間をもってきて、見せ場を作り出しているものが多い。「複数変化型」は、空間の見せ場がさらに複数になり、より劇的な空間演出となっている。「くびれ型」は、例数も少なく、このタイプに積極的な意味は見いだせなかった。「無変化型」では、小規模美術館が多いが、空間幅の変化と同様、導入空間を簡素にし、大げさな演出を避けている例が見られる。その意味は、空間幅の場合と同様である。

4-5 高低差の変化についての考察

アプローチ空間の高低差の変化について、5つのタイプが見いだされた。「上昇型」は、建物や展示室に向かって、アプローチ空間が上昇していくことから、芸術作品（展示室）をより

特別な存在とするだけでなく、高尚な存在とする意味を生じさせる可能性がある。「下降型」は、アプローチ空間が下降していくことから、展示室を異世界と位置づけ、芸術作品を特別な存在とする意味を生じさせる可能性がある。「水平型」は、アプローチ空間がほぼ水平であることから、芸術作品（展示室）をより日常に近い存在とする意味を生じさせる可能性がある。「上下型」や「複数変化型」は、空間に変化がもたらされることで、より劇的な空間演出となる。しかし、実際には、上下する中で、上昇、下降のいずれかに重点が置かれているものが多く、その場合は、「上昇型」や「下降型」の意味と近いものになると考える。

4-6 建物の見え方の変化についての考察

建物の見え方の変化について、6つのタイプが見いだされた。「見えない→見える型」は、最初に観覧者の緊張感、不安感を最大にし、徐々に解きほぐしていくもので、最初の領域に心理的境界を生じさせるものである。「見える→見えない型」は、徐々に緊張感、不安感を増加させるものだが、建築的に大掛かりになるので、実例はない。「一部見える型」「見えない型」は、建物全体を建物に入るまで見ることができないことから、美術作品（展示室）を神秘的な存在と意味づける可能性がある。「全体見える型」は、見え方に変化がないので、美術作品（展示室）をより日常に近い存在として意味づける可能性がある。「複数変化型」は、見え方に変化をもたらすことで、観覧者に緊張感と解放感を交互に与えるため、より劇的な空間演出となる。

4-7 建物外観の印象についての考察

美術館の外観は、アプローチ空間そのものではないが、アプローチ空間を移動する観覧者に強い印象を与える可能性がある。ここでは、前述の5つのタイプについて、その意味を考察する。

「建築オブジェ型」は、建物外観に芸術的な表現が与えられたもので、観覧者に大きな印象を与えることとなる。場合によっては展示されている美術作品より、建築が主役になる可能性があるが、展示作品の内容を暗示したり、観覧者の期待感を膨らませたりすることで、美術館と観覧者との距離を縮める可能性がある。「権威主義型」は、建物外観から権威主義的なものを感じさせるタイプである。このタイプは、「美術館が作品の価値を保証する制度として成立」¹⁾していた時代のもので、今日、その需要はほとんどないと考える。「展示室透過型」は、美術館を「開く」究極のタイプである。保存の観点から、一般化できるものではないが、特に現代芸術や彫刻の美術館において今後も現れてくるものと考えられる。「高透過型」は、「展示室透過型」に比べて「開く」度合いは低いが、美術館の敷居を低くし、「日常」との連続感を高める可能性が高いタイプと考える。「内容表出型」は、その建築表現の難しさから数は少ないが、観覧者の期待感を膨らませ、美術館と観覧者との距離を縮める可能性がある。

5. まとめ

以上のように、アプローチ空間を「外部アプローチの空間幅」「導入空間の空間幅」「外部ア

アプローチの高さ」「導入空間の高さ」「高低差」「建物の見え方」の変化に着目し、それぞれ類型化を行った。そして、それぞれの類型には、美術館を「非日常」の世界とするか、もしくは「日常」と連続した世界とする意味を生じさせる力があることが考察された。また、緊張感を高めたり、解いたり、美術館をより高尚な存在として、あるいは神秘的な存在として意味づけたり、劇的な空間演出とすることで、美術館の「非日常性」をより強調する力があることが考察された。「建物外観の印象」については、美術館を「開く」存在としたり、「閉じる」存在とする意味を生じさせたり、「象徴的」意味を生じさせる力があることが考察された。美術館のアプローチ空間を計画する際には、美術館を非日常の世界とするのか、そうでないのか、開かれたものとするのか、そうでないのか、建物そのものに象徴的意味を持たせるのか、そうでないのかなど、その考え方にしたがってそれぞれの類型を意識的に組み合わせていくと、より効果的なアプローチ空間を構成することができると思う。

6. 今後の課題

今回の分析では、タイプ分けの視点を「空間幅」「高さ」「高低差」「建物の見え方」の変化、「建物外観の印象」に絞った。しかしながら、実地で調査する中で、空間の明るさの変化や、壁面の材料や構成も、美術館に対する考え方を象徴するものとなる可能性があると感じられた。これら別の視点によるアプローチ空間のタイプ分けと、その象徴する意味について考察を深めていくことが今後の課題である。

注

注1) 本研究において、現地調査と文献・インターネット調査の2種類の方法を用いているが、現地調査の場合、図面や写真では表現されにくい細部を捉えることができたが、文献・インターネットによる調査においても、分析項目について類型化を進める上での情報は充分に入手することができた。

参考文献

- 1) 並木誠士、中川理：美術館の可能性、学芸出版社、p.147、2006
- 2) 西沢立衛：美術館をめぐる対話、集英社、pp.54-55、2010
- 3) 津端宏、山本直人編：[建築設計資料] 13 美術館、建築資料研究社、pp.4-32、1986
- 4) 鈴木歌治郎編：美術館（建築計画・設計シリーズ18）、市ヶ谷出版、p.16、1997
- 5) 西沢、前掲書、p.202
- 6) 同上、p.33
- 7) 並木、中川、前掲書、p.165